SMS における主語削除：

ドイツ語における一考察

上村 昂史（うえむら たかし）
奈良工業高等専門学校非常勤講師
ihsakat.arumeu17421@gmail.com

キーワード：主語削除、SMS、話しことば性

1. はじめに

現代社会におけるコミュニケーションでコンピュータやインターネットはもはや必要不可欠なものとなっている。近年それらサイバー・ネットワークを使用したコミュニケーションに関する研究が盛んに行われている。本稿で扱う内容も、これに準じる。情報端末を介したコミュニケーションを提供するツールの先駆けとなったもののひとつに、SMS が挙げられる。携帯電話番号を登録しておけば、短いメッセージを送ることができるサービスである。この SMS で書かれている文に関して、(1) に示すようなある特徴が指摘されている。

(1)	(e)	Bin	gut	in	Hamburg	angekommen.
		be-1sg.Pres.	good	prep (in)	Hamburg	arrive-p.p.

‘(I) have arrived well in Hamburg.’

周知の通り、現代ドイツ語では主語の標示が義務的であるとするのが主流だが、SMS では主語代名詞（ここでは 1 人称単数の *ich*）が標示されない文が多見される。特に、後述するように *ich* が削除される現象がよく見られる。本論では、当該現象を「主語削除 (Subjektellipsis) 」と便宜上称し、特に 1 人称単数 *ich* が省略されるケースの分析を行う。すなわち、SMS における主語削除が生起する条件または由来が考えられるのかにつき見ることにする。

まず第 2 章では、標準ドイツ語および SMS における主語削除に関する先行研究について見る。第 3 章では、さらに掘り下げてドイツ方言における主語削除について概観する。そして第 4 章では、本研究の設定する研究対象および問題について述べる。第 5 章では、

©上村昂史、「SMS における主語削除」
『言語科学論集』、第23号 (2017)、pp. 57–81

第 4 章で述べたことに基づき行った調査の概要について述べ、第 6 章でその調査によって得られた結果について述べ分類を行う。第 7 章では、SMS の主語削除が起こる由来について、コミュニケーション研究を起点にして考察する。最後に第 8 章ではまとめと今後の研究課題について述べる。

本研究は、主語の標示が義務的とされてきた経緯のある現代ドイツ語において、従来の文法研究ではあまり取り扱われて来なかった部分の一端を明らかにすることに資するものであると考えられる。また、ドイツ語の語法に関する記述を目指すものであるためドイツ語教育の分野にも応用が見込まれると考える [1]。

2. 主語削除に関する先行研究

本章では、主語が落ちる現象について扱った先行研究のうち、標準ドイツ語 [2] や SMS に関わるものを概観する。第 1 節では標準ドイツ語における主語落としが許容される場合を見る。第 2 節では、ドイツ語の SMS における主語削除が認定される場合について見ることにする。

2.1 標準ドイツ語における主語削除

冒頭で述べた通り、標準ドイツ語において主語削除が見られる場合を概観する。本節を設ける目的は、後述する SMS の主語削除における特異性を示すことにある。すなわち、標準レベルのドイツ語では SMS のケースに指摘されているような現象が見られないことを示す。

標準ドイツ語において主語削除が見られる場合は、3 つのケースに分類される。まず第 1 のケースは、等位接続詞を伴う文における後続する同一主語の削除である。(2) に文例を示す [3]。

(2)	Ich	komme		aus	Japan,	
	I	come-1Sg.Pres.		from	Japan,	
	und	(e)	wohne	jetzt	in	Leipzig.
	and		live-1Sg.pres.	now	prep. (in)	Leipzig.

‘I come from Japan, and (I) live in Leipzig now.’

先行する文と等位接続詞 *und* 以降における文の主語が同一であるため、重複を避けるために削除が認可される文例と考えられる。このことは、ドイツ語のみならず他言語においても見られる現象である。

一方、標準ドイツ語でよく見られる省略のうちに、①相関詞としての *es*、および②受動態における *es* がある [4]。 以降、①と②について見る。

はじめに①のケースであるが、これも 2 つに下位分類できる。まずは、副文を導き、かつその内容を主文中に示す場合について見る。すなわち、相関詞 *es* が仮主語として主文の文頭に置かれ、その内容を複文が担っている場合である。(3) に文例を示す通り、主文が先行する場合は *es* が出現するが、副文が先行する (3') では *es* の省略が可能である。

(3)　Es　ist　schön,
it　sein-3sg.pres.　great (beautiful)

dass　du　zu　meinem　Geburtstag　kommen　kannst.
that　you　prep. (to)　my-dat.Sg.　birthday　come-inf.　can-2Sg.Pres.
'I find it great, that you can come to my birthday.'

(3')　Dass　du　zu　meinem　Geburtstag　kommen　kannst,
That　you　prep. (to)　my-dat.Sg.　birthday　come-inf.　can-2Sg.Pres.
ist　(e)　schön.
sein-3sg.pres.　great (beautiful).
'(lit.) That you can come to my birthday, I find (it) great.'

次に見るのは、非人称文で用いられる相関詞のケースである。この場合、相関詞 *es* が文頭の位置に置かれ、動詞の活用が 3 人称単数であることからも主語の役割を担っていることが判る。以下に文例 (4) を示す。(4) では「試験のことが心配だ」という内容の文例を挙げたが、意味上の主語は *mir* となり「私には試験のことが心配だ」となる。ところが、この *mir* が文中に置かれる場合は *es* の出現は可能だが、(4') に示した通り *mir* が文頭に来る場合は、*es* は削除されても良い。

(4)　Es　graut　mir　vor　der　Prüfung.
It　fear-3Sg.Pres.　me　Prep.(before)　the-fem.dat.sg.　examination
'I'm dreading the test.'

(4')	Mir	graut	(e)	vor	der	Prüfung.
	Me	fear-3Sg.pres.		prep.(before)	the-fem.dat.sg.	examination

'I'm dreading the test.'

このように、相関詞として分類される *es* は標準ドイツ語において、省略が可能であり、とりわけ非人称文のケースでは、主語として置かれる *es* が、*mir* が文頭に来ることによって省略されることを見た。

最後に受動文で用いられる *es*、すなわち非人称受動のケースにおける *es* の省略について見ることにする。

(5)	（能動文）	Man	tanzt	heute.	
		one	dance-3sg.pres.	today	
	（受動文）	Es	wird	heute	getanzt.
		It	pass.aux.-3sg.pres.	today	dance-p.p.

'People dance today.'

(5')	Heute	wird	(e)	getanzt.
	Today	pass.aux.-3sg.pres.		dance-p.p.

'Today, people dance.'

先行する (5) と後続の (5') は「今日（人は）踊る」という意味内容を含んでいる。ドイツ語では、対応する能動文に対格目的語が存在しない場合、換言すれば受動文に変換した時に対応する主語が存在しない文では、主語に *es* を置き受動文を作ることになる。一方、(5') に示した通り *heute* などの副詞要素が先行する文では *es* の省略が可能である。

このように標準ドイツ語で容認されている主語の省略については、*es* の省略では文例が見られるが、*ich* を含めた *es* 以外の代名詞における省略は、上記の(2) の場合を除き容認されていない。その点からも、ドイツ語 SMS における *ich* の省略は、標準的には認められない特異なものとして捉えることができる。

2.2　ドイツ語 SMS などにおける主語削除 [5]

本節では、SMS など形式上書き言葉に分類されるものにおける主語削除の先行研究について見ることにする。なお、ここでは主語削除は 1 人称単数代名詞 *ich* を中心に扱う。

SMS が導入される以前から、既にある特定の文体では主語 *ich* が落ちる現象が指摘されてきた。まず、日記の文体における主語削除が、 Haegeman (1990: 164ff.) において示されている。以下、文例を (6) に示す。

(6)　(e)　Beschloss,　ihn　zu　kaufen,
　　decide-1.sg.pret.　it-mask.acc.　to　buy-inf.
　(e)　änderte　diesen　Beschluss.
　　change-1.sg.pret.　this　decision
　'(I) decided to buy it, (I) changed this decision'

また、テレグラムにおける主語削除も多見されることが多くの先行研究で指摘されている (Androutsopoulos and Schmidt 2001, Birk 2006 など)。以下の (7) では、送信者がテレグラムで、パリでの滞在を 2 日延期すること、そして日曜日の晩に訪問する旨の文を送ったものである。

(7)　Bleibe　noch　zwei　Tage　in　Paris,
　stay-1sg.pres.　still　two　days　prep.(in)　Paris
　komme　Sonntag　abend.
　come-1sg.pres.　Sunday　evening
　'(I) will stay in Paris for more two days. (I) will come on Sunday evening.'

*Birk (2006: 102)

主語削除の記述は文法書にも見られる。その代表的なものとして Zifonun et al. (1997) が挙げられる。また、話し言葉レベルでの動詞第 1 位文 (Verbspitzenstellung) を扱った Auer (1993) においても、主語削除の文例が示されている。両者で一致していることには、話し手のダイクシスが、コピュラ動詞や助動詞が出現する文例において頻繁に落ちるという主張である。

そして、ドイツ語 SMS における主語削除を扱った研究には、主に Androutsopoulos and Schmidt (2001) および Frick (2017) が挙げられる。Androutsopoulos and Schmidt (2001: 22.ff.)

では、社会言語学の枠組みの中で、SMS の送り手と受け手におけるやり取りを分析することを主眼に置いているが、その傍らで主語 *ich* が頻繁に削除されることについても触れている。以下の表 1 は、人称代名詞の省略の生起についての統計を示している。

表 1　人称代名詞の省略

人称代名詞	生起数	省略数	比率(%)
ich	311	187	60
du	27	7	26
er	4	3	75
sie	4	0	0
es/das	39	20	51
wir	40	12	30
ihr	1	0	0
総計	426	229	54

*Androutsopoulos and Schmidt (2001: 23) 日本語訳は筆者

表 1 を見れば分かる通り、1 人称単数人称代名詞 *ich* は 60%の割合で主語削除が生起することが示されている。確率の上では *er* に準じ、度数の上では最も多い。これは、後述する Frick (2017: 96) においても同様の統計がなされ、同様の結果が示されている。そして、Androutsopoulos and Schmidt (2001: 24) では語用論的側面からの、当該現象についての説が示されている。同所では、先ほどの Auer (1993) が取り扱う動詞第 1 位文の生起の説明を援用し、主語削除も同じく限定された発話行為の中で起こりうると述べられている。その上で、その動詞第 1 位文が生起する条件と主語削除の生起条件に一致する箇所（応答や評価のための発話）が見られるのではないかと述べている [6]。

一方、Frick (2017) では、スイス・ドイツ語の SMS に見られる省略について包括的な研究を行なっており、Frick (2017: 96-103) に人称代名詞 *ich* の削除について言及がなされている。同書では、主語削除という術語が暗に示すような「主語の標示義務があることありき」での論説ではなく、主語が省略されるような構造があることが通常であると述べている。

以上、SMS の主語削除に関する先行研究を概観したが、ここで 1 つ疑問が生じる。すなわち、標準ドイツ語以外のドイツ語において主語削除が容認されないのか、というもので

ある。とりわけ、本章では方言に関する記述を概観していない。そこで次章ではドイツ方言における主語削除の現象を見ることにする。

3.　ドイツ方言における主語削除 [7]

前章では標準ドイツ語や SMS および他の文体について見て来たが、ここである言語における他の話し言葉の変異体では主語削除の現象が見られないのかという見方もあるだろう。実際のところ、南ドイツの方言において、主語が落ちる現象が報告されている。まず (8) にチューリヒ方言の文例を示す。

(8)	Ha	(e)	der	das	nöd	scho	verzellt?
	have-1sg		you-dat.sg.	it	not	already	tell-p.p.

‘Haven’t I told you that already?’

(チューリヒ方言: Cooper and Engdahl 1989:33)

これはアレマン方言に区分されるチューリヒ方言から得られた文例である。この方言では、1 人称単数と 2 人称単数で主語が落ちる現象が報告されている [8]。

本章では、両者の方言における当該現象について、掘り下げて見ることにする。すなわち、以下 3.1 節ではチューリヒ方言について、より多くの文例を概観し、それについての説明について述べることにする。

3.1　チューリヒ方言

本節では、スイスのチューリヒで話されている方言について見る。当該方言では、前節のバイエルン方言と同じく主語削除が生起し、しかも本論で扱う 1 人称単数の場合についても起こることが報告されている。まず、上述の (8) と以下の (9) に倒置語順におけるチューリヒ方言の主語削除の文例を、そして (10) に副文における文例を示す。

(9)	Das	ha	(e)	der	Iris	scho	geschter	gsäit.
	das	have-1.sg.		the-dat.sg.	Iris	already	yesterday	say-p.p.

‘(I) have already told Iris that yesterday’

(チューリヒ方言: Werner 1999: 50, 128)

(10)	wil	(e)	em	Brüeder	alli	Artikel	schicke.
	because		the-dat.sg.	brother	all	articles	send-1.sg.

‘because (I) send my brother all the articles’

(チューリヒ方言: Cooper and Engdahl 1989:39, Cooper 1994:100)

上記の文例が示すことには、バイエルン方言の場合と同じく、ワッカーナーゲル位置における主語削除が容認されることがあるということである。ところが、Werner (1999: 49) においては、この省略は限定的であり、音韻上の制約を受けるという主張を行なっている。換言すると、以下の (11) に示した文例から読み取れるように、母音連続を含む文の場合には、主語削除は容認されないとしている。

(11)	Das	han	*ø/i	erwartet.
	that	have-1sg	(e)/I	expected

‘(I) have expected that'

(チューリヒ方言: Werner 1999: 49)

そのため、チューリヒ方言では主語削除は統語レベルではなく、音レベルの現象であると捉える見方が強い。例えば、Cooper (1994: 100, 110) では、語彙的または統語的に生起する現象として、この音韻上の出現である 1 人称単数のゼロ主語を憶測することは、語彙または統語の規則が先行し、音韻上の書き換えが後回しとなるような理論の考え方であると批判している。

以上が方言における、主語削除の現象についての先行研究の概観であった。次章では、本研究の問題設定について述べることにする。

4. 問題提起

これまでは、それぞれ主語削除に関する先行研究を見たが、本章では本研究の問題設定について述べる。まず、4.1 節では先行研究を踏まえた上で浮上する問題について見ることにする。次に 4.2 節では補論として、SMS 自体の技術的な特性をベースとする説について述べる。最後に 4.3 節において、本研究の調査における問題提起を行う。

4.1 問題点

前章で概観した先行研究を踏まえると以下のような問題点が挙げられる。

まず、SMS の主語削除を指摘する先行研究では、より掘り下げた分析が未だ行われていないことが問題として挙げられる。特に、統語的な生起条件の有無について、または如何なる用法が見られるのかという言語使用の実測に見合った分析は、未だ課題として残っているといえる。また、日記やテレグラムにその由来を求める論説においても、上述の問題については説明が及ばないと考えられる。

ちなみに、Frick (2017: 96ff.) においては文例を示した分析が行われているものの、使用コーパス (sms4science) が話者同士のやりとりを掲載していないため、意味的および語用論的分析までには至っていない。また、使用コーパスがスイス・ドイツ語話者の SMS を使ったものであり、第 2 章で見たように方言の影響を省けないことが指摘できる。

次に、方言に照らし合わせて浮上する問題である。確かに、チューリヒ方言では主語削除が認められるため、当該方言の影響を考慮に入れるという 1 つの論証が可能ではないかという意見も考えられる。しかし、この考え方には注意が必要である。というのも、チューリヒ方言の文例はワッカーナーゲル位置に限り主語削除が容認されるものであるが、冒頭の (1) に示したように、SMS では主語と動詞が正置の場合にも主語削除が起こっている。これは、方言の影響だけでは説明できない。

最後に、本筋からは多少離れるが、果たしてチューリヒ方言を除く他のドイツ語変種において主語削除は生起されないのか、という問題である。すなわち、先行研究で報告されていないと言うだけで、他のドイツ語変種における主語削除の非存在を決定づけるには至らないのではないかと考えられる。このことについては、詳しく第 6 章にて見ることにする。

4.2　【補論】SMS の技術上の条件と主語削除

SMS 送受信は 1 回につき字数が限定されるので、その制限によって省略表現が起こるのではないかという意見も考えられる。確かに、主語削除に適用でき得る論説ではある。そうではあるものの、では何故 SMS において 1 人称単数 *ich* の省略が顕著なのかについての説明ができない。したがって、本研究では、技術上の条件以外の要因について探り、特に用法に注目して調査および分析を行うものとする。

4.3　問題設定

本研究では、3.1 節と 3.2 節における議論を踏まえた上で、以下のような 2 つの点を設定して、そのことについて調査を行う：

1) 生起条件を探るために、SMS において主語削除が起こった文例を分類する。

2) 話し言葉レベルのドイツ語において、チューリヒ方言以外で主語削除が見られるかどうかについて調査する。

5. 調査概要

本研究で行なった調査について述べる。調査期間は 2016 年 9 月 24 日から 2017 年 8 月 6 日までのおよそ 1 年間である。使用したコーパスは、当時デュースブルク・エッセン大学教授（現ハンブルク大学教授）Wolfgang Imo 氏監修のもと 2012 年に開始されたプロジェクトによって製作された MoCoDa (Mobile Communication Database) と称するものである。このコーパスの利点は、話者同士のやりとりで為された一連の会話が収録されていることである。この収録によって、語用論的分析も可能になる。コーパスの規模は、2017 年 11 月 15 日現在 19178 件のメッセージおよび 1061641 語、または 2200 件の会話を収録している。

コーパスでは、SMS の他に欧米圏で広く使われている WhatsApp および iMessage のメッセージを収録しており、検索にかけることでそれぞれの会話を抽出できる機能を備えている。

情報提供者については、匿名で扱われており、メタ・データとして性別、年齢、話者同士の関係性、会話のテーマ、携帯電話の料金プラン等々の情報ごとに検索が可能である。

本研究の調査では、この MoCoDa を使用して、SMS で送受信されたメッセージを抽出し、情報提供者のメタ・データを整理した上で、文例を収集する。その際、上記のメタ・データの他に、文タイプ、主文か副文か、時制、共起する動詞、出現位置（文レベルの位置・会話体レベルの位置）、メッセージの種類（送信か返信か）を追加して考慮する。

6. 調査結果

調査の結果について述べる。文例は全てで 180 件の会話から抽出した。以下、詳細について述べるが、まず前章で記したメタ・データごとの統計を 6.1 節で概観する。次に、収集した文例を 6.2 節で分類する。

6.1 メタ・データ

冒頭で述べた通り、情報提供者および文例についての統計を概観する。まず、文例は 180 件の会話から 123 例を得た。一方、主語 *ich* が生起している文例は 201 例だった。その

ため、比して約 6 割の文例が主語削除を伴うことが示された。これは Androutsopoulos and Schmidt (2001) および Frick (2017) の結果と同様である。

表 2　主語削除

主語生起数	主語削除数	比率 (%)
201	123	61

次に、情報提供者について性別、年齢、職業、話者同士の関係性の項目における結果を示す。上記の主語削除文例について、延べ 246 名の提供者が確認できたが、そのうち 47 名が男性で 76 名が女性であった。割合で示すと、男性が 38%、女性が 62%であり、二項検定（片側検定）の結果 (p 値= 0.0056) を考慮しても、女性の方が男性よりも有意に多いことがわかる。年齢分布については、20 代が多い。というのも、表 5 の通り、情報提供者のほとんどが大学生であることに起因していると考えられる。表 6 の通り、人間関係においては、友人が 50%を超える。以上のことから、学生および 20 代における主語削除について本調査では見ることになる。

表 3　性別

性別	男性	女性	総計
人数	47	76	123
割合 (%)	38	62	100

(p<.05)

表 4　年齢分布

年齢	20 歳以下	20~30 歳	30~40 歳	40~50 歳	50 歳以上	無回答	総計
人数	9	91	7	9	4	3	123
割合 (%)	7	74	6	7	3	3	100

表 5　職業

職業名	学生	会社員	自営業	職業訓練中	主婦	高校卒業	無回答	総計
人数	89	15	6	5	2	1	5	123
割合 (%)	72	12	5	4	2	1	4	100

表 6　話者同士の人間関係

関係性	友人	親子	知人	交際中	同僚	親戚	兄弟	無回答	総計
人数	69	10	9	8	5	4	3	15	123
割合 (%)	56	8	7	7	4	3	2	13	100

次に、文例の特性について統計から見る。まずは、文のタイプおよび主文か副文かについての項目について見る。得られた文例は全て平叙文であった。そして、表 7 に示す通り、全てが主文でもあった。すなわち、本調査では副文における主語削除の文例は確認できなかったということになる。

表 7 主文・副文

文タイプ	文例数	割合 (%)
主文	123	100
副文	0	0
総計	123	100

時制および出現位置、またメッセージの種類についての項目を見る。時制では 75%を現在形が占めている。過去形や現在完了形については、10%台の出現割合となった。

表 8　時制

時制	文例数	割合 (%)
現在	92	75
過去	12	10
現在完了	19	15
総計	123	100

表 9　出現位置（文レベル）

出現位置	文例数	割合 (%)
文頭	90	73
文中	33	27
総計	123	100

表 10　出現位置（会話レベル）

会話内の位置	文例数	割合 (%)
話頭	28	23
話中	95	77
総計	123	100

表 11 メッセージの種類

種類	文例数	割合 (%)
応答	68	55
非応答	55	45
総計	123	100

次に出現位置については、文レベルでは文頭に位置されることが多いが、会話のレベルでは話中に出現することが多いことが示されている。文頭に多いのは、主語および動詞が正置されるべき文例において主語削除が生起していることに起因すると考えられる。

また、メッセージの種類では、Androutsopoulos and Schmidt (2001: 24) が述べるように、応答のメッセージにおいて省略が起こる文例が 55%を占めている。

最後に、参考までに動詞の出現頻度について以下の表 12 に示す。およそ半数を *sein* および *haben* が占めていることがわかる。なお *sein* のうち 5 例と *haben* のうち 14 例が完了の助動詞として役割を担っている。

表 12　動詞の出現頻度

動詞	sein	haben	müssen	wollen	wissen	freuen	その他	総計
出現数	32	30	9	8	6	5	33	123
割合 (%)	26	24	7	7	5	4	27	100

6.2　分類

冒頭で述べた通り、文例の分類を行う。分類の基準には、文脈上に依存して主語削除が行われているか、それとも文脈に依存せずして主語削除が出現しているかを採用する。まずは、文脈に依存していると考えられるケースについて見る。この場合に分類されたものは数が少なく、わずか 8 例にとどまった。以下の (12) に示す。

(12)　ich　würd　ja　gerne　für　dich　einspringen
I　would　yes　like　for　you　substitute-inf.
(Nachricht #3 - 30.12.2013 - 14:06:05)

aber　(e)　bin　gott　sei　dank　im
but　be-1sg.　god　be-konj.1sg.　thank　in+the-mask.dat.
Urlaub　diese　Woche
vacation　this　week

(Nachricht #4 - 30.12.2013 - 14:06:05)

‘I would like to substitute for you, but (I) am fortunately on vacation this week.’

この文例は 26 歳の大学生の女性によって書かれたメッセージである。受け手との関係は知人である。書き手は、忙しい受け手にこのメッセージを送信しているが、その中で代役を務めてあげたいが、書き手は休暇中であって、それが出来ないという旨の SMS を送っている。この中で、先行する SMS において主語が出現しているが、後続する方では省略されている。これは先行する主語がなおも後続する主文の主語をも担っているためと解釈できる。

一方で、文脈に依存しない場合もある。以下の (13) に代表的な文例を示す。

(13) A: Moin schatz :* (e) bin jetzt auf der arbeit..
morning darling be-1.sg. now on the-fem.dat. work

schreib mir wenn du wach bist
write-imp. me when you awake be-2.sg.
(Nachricht #1 - 01.12.2013 - 09:05:05)

B: Morgen baby gehts dir gut?
morning baby go+it you well
Wie läuft die Arbeit? :)
how go-3.sg. the-fem. work
(Nachricht #2 - 01.12.2013 - 10:23:05)

A: Ganz jut.. (e) bin zwar etwas müde
almost good be-1.sg. although a little tired
aber (e) werde das wohl überleben ;)
but will it well survive
(Nachricht #3 - 01.12.2013 - 10:30:05)

‘A: Morning, darling [emoticon] (I) am working now. Text me when you’re awake.’
‘B: Morning, baby. How’s it going? How does your work go?’
‘A: Not bad.. (I) am a little bit tired, though, but (I) will survive.’

この文例では、書き手 A が男性で 25 歳、書き手 B が女性で 21 歳で、交際中の関係にある。朝の勤務中に SMS を書き手 A が送信しているが、この中で主語削除の文例が 3 件確認でき、そのうち２つは文脈依存がないものと判断できる。このように、文脈依存が確認できない文例は 115 件にのぼった。

このように、分類を試みたが SMS のみの分析では、明確な用法についての記述は非常に難しい。そこで、次章では SMS のメッセージが言語の如何なる側面を反映しうるのかについての理論的枠組みを見た後で、さらに掘り下げて検討を重ねることにする。

7. 話し言葉レベルにおける主語削除

本章では、ドイツ語 SMS とドイツ話し言葉の連関を示した上で、ドイツ話し言葉において主語削除の現象がどのような場合に見られるかについて見ることとする。7.1 節では、話し言葉と書き言葉の変異体 (Variante) における連関を示した Koch and Oesterreicher (1985) のモデルを概観し、SMS と話し言葉における関連性について論じる。次に、7.2 節では、ドイツ語話し言葉における主語削除の現象を実際に行われた会話を分析することで生起要因を探ることにする。

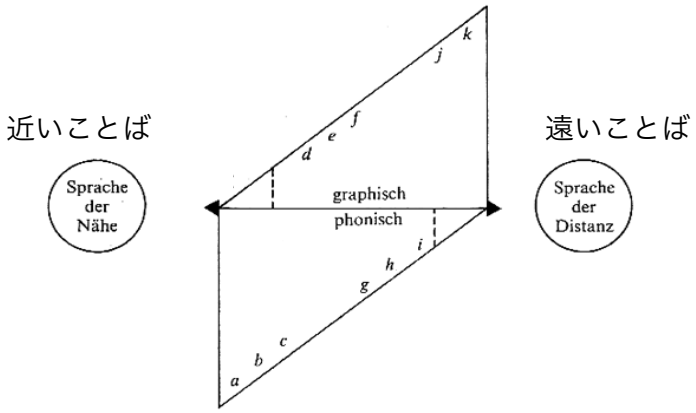
7.1 Koch and Oesterreicher (1985) のモデル

本節では、SMS と話しことばが如何に関連づけられるかについて見る。ここでは、話しことばと書きことばが、双方対立するものではなく、両者の混交によって各々に様々な変異体が形成されるかたちで、1 つの継続体 (Kontinuum) あるいはスケール (Skala) をなすことについて述べる。しかし、その前に話しことばと書きことばの区分についての先行研究を見る。

一般的には、話しことばは書きことばとは明確に区別されうるとする説も見受けられる。すなわち、話しことばと書きことばの使い分けを名目にしている以上、両者が明確に区別されうるとしているのである [9]。同じく学術的には、例えば Kramsh (1998: 37–41) において話しことばと書きことばについて 7 つの対立項が示されている。

しかし、この 2 項対立は言語の実測を反映させているものであろうか。例えば、書きことばの中には多数の文体と呼ばれるものがある。また、話しことばにも口調がある。したがって、話しことばと書きことばの間には多数の変異体が存在し、2 項対立はあまりにも単純な一般化のように考えられる。このように、両者の間にグラデーションが存在しうることについては Fiehler et al. (2004) に代表されるような立場がある。ここでは、Fiehler et al. (2004: 12–22) にも書かれているように、話しことばの領域を多層的に捉え、その外延性についても構想する必要性を説いている。

この立場をモデルにした論考に、Koch and Oesterreicher (1985) がある [10]。このモデルでは「遠いことば (Sprache der Distanz) 」と「近いことば (Sprache der Nähe) 」に様々なある言語の変異体を配置している [11]。このことからも分かるように、「話しことば」と「書き



a: 打ち解けた談話　e: 日記　i: 講演
b: 友人との電話　f: 個人的手紙　j: 新聞記事
c: インタビュー　g: 面接時の談話　k: 行政上の規定文
d: 印刷されたインタビュー　h: 説法

図 1　Koch and Oesterreicher (1985) のモデル　翻訳は高田他 (2011: 13)

ことば」は対立しておらず、様々な変異体による音声コミュニケーションと書記コミュニケーションの集合体として捉えられている。図 1 を用いて、このことについて掘り下げて見る。先述の通りこのモデルの「遠いことば (Sprache der Distanz) 」と「近いことば (Sprache der Nähe) 」という概念を対置させて構成されている。これは送り手と受け手の関係が「近い」か「遠い」かを基準にしており、その送り手と受け手間に、「音声的 (phonisch) 」および「書記的 (graphisch) 」である。2 つの「メディア (Medien) 」が存在している。図中の a から k の記号が示しているのは、それぞれのメディアがどのような変異体を有しているのかを表したものである。それぞれ、そして、平行四辺形を中心に「書記的」なメディアの性格が「遠いことば」では強くなり、反対に「音声的」なメディアの性格が「近いことば」では強くなることが示されている。言い換えると、「遠いことば」のコミュニケーションでは「書きことば性　(Schriftlichkeit)　」が強くなり、「近いことば」のコミュニケーションでは「話しことば性　(Mündlichkeit)　」が強くなることをこのモデルは主張している。

では、SMS はどの位置に置かれうるであろうか。Koch and Oesterreicher (1985) が提唱するのモデルが出された時代には、未だ SMS はおろか携帯電話によるコミュニケーションも主流ではなかったため、このモデルには導入されていない。しかし、SMS によるコミュニケーションは、本研究で採集したデータに基づけば、比較的「話しことば性」が強いものと推察することができる。その理由は以下に挙げる 2 つである。

まず、送り手と受け手の関係が友人同士のものが多いという点である。そのため、書記的メディアではあるが、コミュニケーションのステータスは図上の b（友人との電話）と同様に「近いことば」が用いられているように考えられる。

2 つ目には、SMS のコミュニケーションは「話しことば性」が優位になる傾向が、指摘できるためである。Schlobinski and Watanabe (2006: 405–409) および Watanabe (2007: 259–262) では、携帯電話によるメッセージ・コミュニケーションで「話しことば性」が強くなることを指摘している。このことは、我々が日常生活で上記のようなメッセージのやり取りの際に、話しことばのように書いていることに鑑みれば納得のできるものである。

7.2　話しことばにおける主語削除

本節では、話し言葉レベルにおける会話中の主語削除の文例をもとに、その用法について探る。本研究のために、筆者が独自に収集した文例は 23 件であるが、そのうち代表的な 2 例をここに示す。

(14) Kunst

01　C:　Was hat=s damit?
02　A:　habe ich vor vierunddreißig JAHren
03　　mein schwiegervater(s) sperrmüll also von sperrmüll gerettet
04　C:　DAS
05　A:　　| das Bild ja: [h]
06　B:　　| ja
07　C:　(0.7) [h] ok (0.1) **(e)** gratuliere　　|
08　B:　　| [xxx]
09　A:　　| nun hats
10　D:　　| und der stand ist (.) eh
11　　auch ein haufn vor ei(ne)m haus?

C:　What is it all about?

A:　I have rescued it from garbage 34 years ago.

C:　This?

A:　This picture, yes.

B:　Yes.

C:　OK. (I) congratulate (you).

D:　And the stand is, eh, also a mountain before a house?

(Bayerischer Rundfunk)

上記の(14)は、鑑定士による美術品の評価をテーマとしたテレビ番組によるものである。話者 A と話者 B がゲストであり、話者 C と話者 D が鑑定士である。提示された絵画について話者 A がゴミの中から「救った」と述べている。その確認のために鑑定士の一人である話者 C が「これ」と発話した後に、第 07 行目で主語削除の発話を行なっている。その後、立て続けに同時発話が起こり、もう一人の鑑定士である話者 D が質問して、話は進んでゆく。

ここで読み取れることがひとつある。話の続きがあることから逆算して、鑑定士の話者 C は、相槌に変わるとっさの一言として主語削除の発話を行なったのではないかと推測できる。次の文例 (15) では、この推測を裏付けるものとして捉えることができる。

(15) Oktoberfest

01　A:　SO jetzt gibt=s aber noch ne direkte Verbindung hier zum ZE:lt.

02　B:　>ja<

03　A:　zu den <Steinbergs>

04　B:　genau

05　A:　(d)es münchner herz (0.4) wie kam=s un(d) was macht ihr?

06　B:　(0.6) wir unterstützen nicht das MÜNchner sondern diese (0.3)

07　　unterorganisation das perlacher herz | weil　　|

08　　| M: **(e)** verstehe |

09　　quasi: familie steinberg ja: in (0.5) [xxx] auch e:: (0.5) in in perlach quasi: des

10　　perlacher herz hat […]

A:　So, now there is but still a direct connection here to the tent.

B:　Yes.

A:　To the ´´Steinberg´´

B:　Alright.

A:　The “Munich Heart”. How did it come and what do you do?

B: *We don't support "Munich Heart", but the subordinated one: "the perlacher Heart", (A: (I) understand), because like, Steinberg family has, yeah, in also, eh, in perlach like, the preacher Heart.*

(münchen.tv)

話者 A はインタビュアーであり、ある団体に属する話者 B のインタビューを行なっている。そのインタビューの冒頭、話者 A は話者 B の所属する団体の親の団体名を間違えて言ってしまう。そこで話者 B が第 06 行目から訂正を行うのであるが、話者 A が第 08 行目で「わかりました」と発話しており、その発話が主語削除の発話となっている。この場合においても、とっさの一言または急ぎの一言として主語削除が出現するものと考えられる。

8. 結語

本稿では主に SMS で見られる 1 人称単数代名詞 *ich* の削除について見て来た。まず、先行研究で述べられている説を概観し、その問題点について個別に言及した上で、問題設定を行った。その問題についてコーパスに基づいた調査を行い、得られた結果をもとに、主語削除が起こるケースを分類した。最後に、このような文体が生起した要因について述べた。そこでは、Koch and Oesterreicher (1985) のモデルから、SMS 文体がドイツ話しことばの影響を受けている、すなわち話しことば性が高い文体であることに言及した。そこで、ドイツ話し言葉における主語削除の文例をトランスクリプトおよび分析して、これらの文例では「急ぎの一言」または「とっさの一言」が要される場合に主語が落ちることについて指摘した。本研究では、先行研究の説を一部修正し、主語削除の実態についてその一端を明らかにしたものと考えられる。

今後の研究課題は 2 点ある。1 つは、上に提示した説のさらなる検証である。上記の説の通り、果たして SMS において「急ぎ」または「とっさ」のメッセージ送信を計測できるのか、という問題が残る。むろん、コーパスには送信日時が標示されているため、その時間から計測が可能なようにも考えられる。しかし、SMS を含めたメッセージ送信には、利用者が隠れているために、計測は一筋縄ではいかない。例えば、前日にメッセージを受信したのにもかかわらず、一日中気が付かず、ようやく今日になって気付き急いで返信した場合も、時間計測だけでは「遅い返信」と判定することになる。この点について課題は大変多いように思われる。もう 1 つは、この主語削除の現象がインターネットにおけるドイツ語の使用では定型化しているのではないかという説の検証である。前述の通り、急を要する場合を想定した主語削除の生起を最終的に本論の結びとしたが、以下の (16)

に挙げるように、その反例とも思しき文例が SNS サイトである Facebook から得られている。

(16)　(e)　Hab　gerade eben　meinen　Stimmzettel　für　die

have-1sg.　just　even　my-acc.　vote　for　the-fem.acc.

Briefwahl　eingetütet.

letter-election　pack in-p.p.

‘(I) just packed in my vote for the letter-election.’

いずれも、送信者には時間がある場合であると想定されるものであるが、なおも主語削除が見られる。これは、Frick (2017: 96 ff.) が提唱するように、既に SNS では主語 ich が定型化し、文体の構造上で主語省略の容認が一般化している説を支持することになる。それが実証された場合に、本論の説の位置付けを見直す必要があると考えられる。

謝辞

本研究は多くの助力によって成し遂げられたことについて、厚く感謝の意を表したい。まず、コーパスを提供下さった Wolfgang Imo 教授には、そのご好意に御礼を申し上げる。会話ユニットとしてアーカイブされたコーパスは大変貴重であり、なしでは研究は進められなかった。重ねて御礼を申し上げる。

注

[1] Goethe-Institut が主宰する検定試験 Goethe-Zertifikat A2 では、ある状況設定のもとで SMS に似せた文を書く課題が提示されており、試験官は SMS の文体について把握しておく必要がある。また、Hueber Verlag (2014: 30) では、主語削除が行われた文が掲載されており、同書を使用する教員は、このことについて教えられるように準備しておかなければならない。

[2] 第 1 章で扱う標準ドイツ語とは書き言葉レベルが考慮されるものとする。

[3] Dudenredaktion (2009[8]: 621) を参照のこと。

[4] 以降本節では、Dudenredaktion (2009[8]: 822 ff.) を参照のこと。

[5] なお、他言語における主語削除は本筋からは離れるので、本論では割愛する。しかし、生成文法における pro-drop 言語の対象外となるドイツ語以外の言語においても主語削

除は見られることを付記しておく。たとえば、英語については Biber et al. (1999: 1048)、Haegeman and Ihsane (1999, 2001) 、 Nariyama (2004) などを参照。

[6] Auer (1993: 207ff.) を参照のこと。

[7] ドイツ方言区分および名称については、König (2007: 230f.) を参照のこと。また、インターネット上でも以下のようなサイトで詳しい方言地図を参照することができる。URL:https://de.wikipedia.org/wiki/Deutsche_Dialekte

[8] Rosenkvist (2012, 2015) では他にシュヴァーベン方言などにおいて当該現象が生起することが示されている。

[9] 例えば、インターネットで「話しことば　書きことば」と検索すると、論文やビジネス文書における書き言葉文体の「使い分け」について管見の限り書かれている記事が多くヒットする。

[10] 本論では、Koch and Oesterreicher (1985) のモデルに基づいて論を展開するが、このモデル自体に問題がないわけではない。モデル自体の議論に関しては、Ágel and Hennig (Ed., 2007) や Dürscheid (2006[3]) および渡辺 (2009) を参照のこと。また、この註以降に出る術語の翻訳については渡辺 (2009) および 高田他 (2011) を参照した。

[11] Koch and Oesterreicher (1985) のモデルに関する説明については、高田 (2011: 13 ff.) を参照のこと。

参考文献

Androutopoulos, Jannis and Gruly Schmidt. 2001. SMS-Kommunikation: Ethnografische Gattungsanalyse am Beispiel einer Kleingruppe. *Zeitschrift für Angewandte Linguistik* (ZfAL) 36. 1–31. From www.ids-mannheim.de/prag/.../tp/tp7/SMS-Kommunikation.pdf

Auer, Peter. 1993. Zur Verbspitzenstellung im gesprochenen Deutsch. *Deutsche Sprache* 23. 193–222

Axel, Katrin. and Helmut Weiß. 2011. Pro-drop in the History of German. From Old High German to the modern dialects. in Gallman, Peter and Wratil Melani. (eds.), *Null pronouns,* 21–52. Berlin: De Gruyter.

Ágel, Vilmos and Mathilde Hennig. 2007. *Zugänge zur Grammatik der gesprochenen Sprache*. Tübingen: Niemeyer.

Biber, Douglas, Johannson, Stig, Leech, Geoffrey, Conrad, Susan and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson Education Limited.

Birk, Uršula Krevs. 2006. *Argumentellipse: Aktantenweglassung in deutschen und slowenischen Reportagetexten*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Cooper, Katrin. 1994. Null Subjects and Clitics in Zürich German. in Zvi Penner (ed.) *Topics in Swiss German Syntax*, 59–72. Bern: Peter Lang.

Cooper, Katrin and Elisabeth Engdahl. 1989. Null Subjects in Zürich German. *WPSS* 44. 31–44.

Dürscheid, Christa. 2006[3]. *Einführung in die Schriftlinguistik*. Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht.

Fiehler, Reinhard, Barden, Brigit, Elstermann, Mechthild and Barbara Kraft. 2004. *Eigenschaften gesprochener Sprache*. Tübingen: Narr.

Frick, Karina. 2017. *Elliptische Strukturen in SMS - Eine korpusbasierte Untersuchung des Schweizerdeutschen*. *Empirische Linguistik* Band 7. Berlin / Boston: Walter de Gruyter.

Fuß, Eric. 2004. Diachronic clues to pro-drop and complementizer agreement in Bavarian. in Fuß, Eric and Carola Trips (ed.) *Diachronic Clues to Synchronic Grammar*. 59–100. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Haegeman, Liliane. 1990. Non-overt subjects in diary contexts. in J. Mascaro and Nespor Marina (eds), *Grammar in Progress, GLOW essays for Henk van Riemsdijk*. 167–174. Dordrecht: Foris.

Haegeman, Lilliane and Tabea Ihsane. 1999. Subject ellipsis in embedded clauses in English. *English Language and Linguistics* 3(1): 117–145.

Haegeman, Lilliane and Tabea Ihsane. 2001. Adult null subjects in the non-pro-drop languages: Two diary dialects. *Language Acquisition* 9(4): 329–346.

Hueber Verlag. 2014. *Menschen A2.1. Deutsch als Fremdsprache. Kursbuch*. Ismaning: Hueber Verlag.

Koch, Peter and Wulf Oesterreicher. 1985. Sprache der Nähe – Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. *Romanisches Jahrbuch* 36: 15–43.

Kramsch, Claire. 1998. *Language and Culture*. Oxford: OUP.

König, Werner. 2007. *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

Nariyama, Shigeko. 2004. Subject ellipsis in English. *Journal of Pragmatics* 36: 237–264.

Rosenkvist, Henrik. 2012. Null subjects in Yiddish – some preliminary observations. Discourse and Grammar – A Festschrift in Honour of Valéria Molnár. Brandtler, Johan, Håkansson, David, Huber, Stefan and Eva Klingvall. (eds.) *Centre for Languages and Literature*, Lund University: 433–445.

Rosenkvist, Henrik. 2015. Null subjects and Distinct Agreement in Modern Germanic. lingbuzz/002959, 1–37. From http://ling.auf.net/lingbuzz/002959

Schlobinski, Peter and Manabu Watanabe. 2006. Mündlichkeit und Schriftlichkeit in der SMS-Kommunikation. Deutsch-Japanisch Kontrastive. in Neuland, Eva. (ed.) *Variation im heutigen Deutsch: Perspektiven für den Sprachunterricht.* 403–416. Frankfurt a. M.: Lang.

高田博行・椎名美智・小野寺典子. 2011. 『歴史語用論入門–過去のコミュニケーションを復元する』東京: 大修館書店.

Watanabe, Manabu. 2007. Handysprache und -kommunikation im Spannungsfeld zwischen Mündlichkeit und Schriftlichkeit. in Ryozo, Maeda, Wilhelm, Vosskamp and Teruaki Takahashi (eds.). *Schriftlichkeit und Bildlichkeit. Visuelle Kulturen in Europa und Japan.* 251–263. München: Fink.

渡辺学. 2009.「話しことばの特性をどのように測定したらよいか」, 高田博行 (編) 『日本独文学会研究叢書 065 話しことば研究をめぐる 4 つの問い』1–20. 東京: 日本独文学会.

Werner, Ingegerd. 1999. *Die Personalpronomen in Zürichdeutschen*. PhD-thesis, Lund University.

Zifonun, Gisela, Ludger Hoffmann and Bruno Strecker. 1997. *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin / New York: De Gruyter.

辞書

Dudenredaktion. 2009[8]. Die Grammatik. Mannheim/Zürich: Dudenverlag.

コーパス

Bayerischer Rundfunk, 25.10.2014, „Geborgener Schatz: "Hofszene" von Leo Putz (BR, Kunst and Krempel)“, URL: https://www.youtube.com/watch?v=SfaDJXyTFMQandt=11s

MoCoDa (Mobile Communication Database), URL: http://mocoda.spracheinteraktion.de/

München.tv ,28.9.2017, „Oktoberfest 2017 Tag 13 live! Die Wiesn aus dem Hofbräu-Festzelt“ URL: https://www.youtube.com/watchv=26w6IZtCaLkandlist=FLmn6uwaYc8brMxiK9_Dgnpwandindex

sms4science, URL: https://sms.linguistik.uzh.ch/bin/view/Main/WebHome

Subject Ellipsis in SMS:
An Investigation on German

Takashi Uemura

In this paper, I survey on the ellipsis of the first singular subject pronoun in German (*ich*) which is found in SMS. Compared with the written standard of German or German dialects, SMS allows it more widely. Thus, I seek for the background of this phenomenon. I used a SMS-Corpus, MoCoDa (Mobile Communication Database), which was created by a project of Duisburg-Essen University, supervised by Prof. Dr. Wolfgang Imo. Based on the research on the corpus, I clarify that the subject-drop occurs without depending on preceding sentences. Then, I insist on that this phenomenon reflects the spoken style of German, based on the model proposed by Koch and Oesterreicher (1985). Therefore, I argue that the drop of "ich" comes from the spoken variety of German, using a data taken from conversation of German native speakers. Finally, I point out that subject-ellipsis of *ich* occurs also in them. It is then proposed that the subject-ellipsis of German in SMS reflects the orality of it.